教育長は…こう考える…

和田哲雄徳島県藍住町教育長に聞く

予防教育で人生を前向きに

徳島県藍住町では、いじめや不登校などを未然に防ごうと、予防的に子どもの健全な心の育成を目指す「予防教育」の取り組みを実践している。レクリエーションを交じえて遊びながら学べるよう工夫されている教育法で、鳴門教育大学が普及活動を展開。県内を中心に、全国にも導入の動きが広がっている。藍住町教育委員会では2012年度に試験導入し、今年度からは町内全4小学校の3～6年で実施している。「予防教育で培う自己肯定感は、人生を前向きにしていくための基礎だ」と語る旗振り役の和田哲雄教育長に、導入の狙いや経緯について聞いた。

■自己肯定感の育成が大事

――予防教育導入の狙いは。

日本の子どもたちは、自分に自信がなく、将来の夢が描けないでいる。諸外国の子どもたちは、夢があり、自分が大好きだという。日本はどうしても閉塞（へいそく）感があり、まずは自己肯定感を培う必要がある。自己肯定感を持っている子は全てを前向きにこなせる。ちょっとの事ではへこたれない。人間関係でトラブルがあっても、積極的に打開しようとしていく。自分に肯定的な人は、他者にも優しい。本当に大切なことだと思う。

たまたま県教委の職員との雑談の中で、予防教育の存在を知った。例えば、自分の子どもの頃を想像すると、「～してはいけません」と言っても耳に残らなかった。予防教育のように気持ちが盛り上がっている方が、子どもたちの心に響く。実際に授業風景を視察すると、右脳に呼び掛ける教育だと感じた。

今日的課題として、いじめ問題がクローズアップされているが、発生した後に対症療法的に対応するよりも、前もって発生しないように、「自分も仲間も大切な存在だから、いじめなんてとんでもない」と思えるようにすることが大事だ。

インタビューに答える和田教育長

――具体的な取り組みは。

各学年8時間、総合的な学習の時間などを活用して実施している。小学3、4年生は四つある予防教育の単元のうち、「自己信頼心の育成」を採用している。自己信頼心とは、自分はとても大切な存在で、同じように仲間も大切な存在だと気付くこと。人生を前向きに、肯定的にしていくための基礎だ。5年生以降は「向社会性」や「ソーシャルスキル」などの単元も採用できる。

2011年度に鳴門教育大の予防教育科学センターで予防教育の普及に取り組む山崎勝之教授のチームが県内の小学校で実践するという話を聞き、町教委と校長とで視察した。12年度からは、山崎教授にお願いして、二つの小学校のそれぞれ3年生と4年生を対象に、モデル的に導入してみた。手応えがあり、13年度からは町内の全4小学校で、保護者も参観できるようオープン型で実施した。最初の1、2時間目の授業は、鳴門教育大のスタッフと協力して実施したが、3、4時間目以降は学級担任がやることにした。

14年度からは5年生にも拡大し、学校の先生たちだけでやっている。人事異動があるのが頭の痛いところだが、それぞれの学校が工夫しながらやってくれた。今年度は6年生まで拡大し、来年は中学1年でもやりたいと考えている。

先生方には無理をお願いしてやってもらった。「3年間はやってほしい。それで効果がなければやめてもいい」と。初めての先生がほとんどなので、プレッシャーと準備期間がかかる。必要に応じて、教員向けに夏期研修などもやった。各学校には予防教育コーディネーターを置いている。

校長や教員からは、以前に比べて少しずつ子どもたちが落ち着いてきたと聞いている。周りのことを考えずにやんちゃをする子どもが減ってきたようだ。一般的に高学年になるにつれ、人との関わり方に消極的になる傾向があるが、それが食い止められ、改善したと思う。

■家庭教育が出発点

――なぜ、自己肯定感が必要と考えるのか。

自己肯定感の育成は、本当は予防教育ではなく、家庭教育が出発点。自分は無条件に親から愛されていると感じること。その人間関係が出発点になっている。甘やかしとは違う。予防教育よりも家庭教育、その中核は親の愛だ。でも、学校ができる範囲でやろうというのが予防教育の位置付けだと思う。

家庭教育の充実のために、「親学講座」を開いている。入学説明会に押し掛けて、30分くらい時間をもらい、「しっかり抱き締めてほしい」「感情的に怒るのではなく、成長を願って叱ってほしい」というようなことを話す。

校長時代、学校評価アンケートと一緒に保護者の自己評価アンケートも実施した。「自分の愛情が子どもの心の底の底まで届いていると思うか」との問いに、4段階評価で一番上の「そう思う」は4分の1を切っていた。子ども自身も「愛されている」と自信を持っている子は少ない。

そこで、幼小中のPTA連合会の方々に家庭教育の大切さや実践すべきことを考えてほしいとお願いしたところ、「家庭教育7カ条」を作ってくれた。「ありがとうを伝えよう」「子どもの良さを認めてあげよう」「共に過ごせる時間を大切にしよう」――などがその内容だ。社会性を身に付けて、子どもたちが自己肯定感を持てるようにという抽象度の高い狙いが、具体的になっている。文言は、学校の配布プリントを挟むためのクリアファイルに印刷した。

――大手化学メーカーから民間人校長に転身した。そうだが、きっかけは。

思い返すと幾つか要因はある。父親が地方の国立大学の教員で、毎週夜遅くまでゼミを開き、自宅に学生を招いたりしていた。その父の教育魂が根底にある。それに会社員時代の30年間で、経理や総務、人事などを担当してきたが、新卒採用の場面などで、やはり、これからの日本にとって教育が大事だと感じていた。一人娘を病気で亡くし、リタイアしたら小学校のボランティアにでもなろうと思っていたところで、たまたま募集を知った。

自分ができることを目いっぱいしようと思っていた。着任が決まり不動産業者に、小学校に一番近い所に住めるようお願いすると、2階から校庭が見える物件に決まった。「校長兼守衛」といわれ、日曜日でも地域住民が校庭に犬が紛れ込んでいるとか、水道の蛇口が開いたままだとか教えてくれた。

教員出身ではないから感じたのかもしれないが、地域の教育力を学校に生かさない手はないと思っていた。学校と地域の関係は、太鼓とばちの関係。小さくトントンたたけば、小さく返ってくるし、大きくたたけばドンドンと返ってくる。こちらの熱意によって、地域の方が待っていたかのように「やりましょう」と言ってくれる。これが本当にありがたかった。

教員も、最初は民間出身ということで身構えただろうが、協力してもらってありがたかった。新しいことを提案するにしても、教員出身の校長だったら「あなたも現場の苦労を知ってるでしょう」と言われてしまうが、私が「これをやろう」とむちゃを言っても、「仕方ないかな」ということがあったのだろう。

【横顔】52歳まで大手化学メーカーに勤務。2003年に徳島県教委が公募した民間人校長枠で採用され、藍住町立藍住東小などの校長を歴任。10年4月から現職。「読書量には自信がある」との言葉通り、夏休み教室では自ら古典や熟語などを教える。大分市出身。神戸大学経営学部卒。

（山本拓也＝徳島支局）

時事通信社『内外教育』2015年10月13日号より